委託事業実施内容報告書

平成22年度「生活者としての外国人」のための日本語教育事業

【ボランティアを対象とした実践的研修】

受託団体名： 浜松学院大学

1 事業の趣旨・目的

地域日本語教室の講師・コーディネータ間のネットワーク、大学と地域日本語教室のネットワークを構築し、静岡県西部における地域日本語支援活動の充実を図る。教室が抱える課題を自ら発見、解決できる自己教育力を持った講師・コーディネータを養成する。

2 企画委員会の開催について

【概要】

第1回		
開催日時	出席者	会議の概要
６月４日（金） 16:20～17:50 開催場所 浜松学院大学 議題 事業内容の確認	三輪千明 山田国明 川添裕子 近藤知子 米勢治子 小林芽里 久澄絵美 杉浦徹衛 村木恵子 松岡真理恵	●事業内容説明 ・対話型の教室活動を継続していくためには各参加者が自らの活動を振り返り改善することが必要と感じ、研修の形で個人のステップアップを図るため研修実施を企画し申請した。 ・アクションリサーチ（以下 AR）についての説明。 ・公開講座を加えることについて。対話活動を広く一般に知らせる。 ●事業計画説明 ・採択までの経緯。
第2回		
開催日時	出席者	会議の概要
９月３日（金） 15:40～16:40 開催場所 浜松学院大学 議題	三輪千明 山田国明 川添裕子 横内美保子 米勢治子	●事業経過報告 ・公開講座として開催した第１～３回の様子とアンケート結果を報告。 ・参加者の大半が日本語教育に関わっており、アンケート回答内容を見ても熱心に活動に取り組んでいる様子がうかがわれる。 ●質疑応答

事業経過の報告、 AR 研修の内容	小林芽里 杉浦徹衛 村木恵子	・公開講座の開催時間の設定は負担が大きいのでは。 ・受講後の活動における受講者の意識変化が気になる。 ●今後の講座内容について、問題点議論 ・AR を用いた方法については再検討中。 ・AR の回からの参加希望者が少ない。AR があまり知られていないこともあり関心が薄く、負担が大きいと思われているのでは。地域において対話型活動の実践例は少なく、活動現場を持っていないと AR の実践は難しいということも考えられる。 ・研修に PCM（プロジェクトサイクルマネージメント）の手法の一部である問題分析・目的分析を取り入れることの説明。各活動場所の抱える問題を参加者全員で共有し、問題解決に向けて話し合うことで、同じ問題について各自の意見を出し解決法を検討していく中で、ひとつの教室活動に対して思い入れが生まれるのが最大の利点。

第3回

開催日時	出席者	会議の概要
2月25日（金） 15:40ー16:40 **開催場所** 浜松学院大学 **議題** 事業成果の報告、 総括	三輪千明 山田国明 川添裕子 近藤知子 横内美保子 米勢治子 小林芽里 久澄絵美 杉浦徹衛 松岡真理恵	●事業報告 第４回公開講座の様子、第５回目以降のアクションリサーチ（以下 AR）を用いた実践的研修の各回の様子を報告。他の地域で対話型を取り入れた教室の見学が参考になった。AR の課題決定に問題分析の手法を取り入れた試みは、問題の整理・意識化ができ有効だった。また、AR に対する心構えができたのでは。 ●事業総括 ・教室活動の問題点を確認し、皆で共有できた。 ・公開講座はとても充実しており、いろいろな分野の人が参加してくれてワークショップも盛り上がった。 ・今回できなかった問題についても、今後取り組んでいきたい。 ・人数は少なかったが活動を振り返るきっかけとなったことは意義深い。 ・今回の参加者はみな AR のできる素地や経験があり、コンセプトを理解し生かせる人たちだった。もう少し長いサイクルでできる研修ならより意味のあるものになっただろう。 ・研修は今回の事業で終わらせず今後も継続すれば、それがどのようなものか認知されて参加者も増えるのではないか。 ・日本語学習の新しいかたちともいえる対話型学習とその将来の研修のあり方を提示できた。

【写真】

3　研修講座の内容について

①研修講座名

「日本語ボランティア実践講座「めざせ！対話中心の活動」」

②研修の目標

地域日本語教育について知見を深め、アクションリサーチの手法を用いて、おしゃべりを中心とした教室活動を通して自分たちの課題に気付き、課題解決に向けて実践し、実践過程を振り返る。

③受講者の総数　:54人

（日本：５２人、ブラジル：２人）

④開催時間数（回数）　:42時間　（17回）

・公開講座：４時間×４回＝16 時間

・アクションリサーチ：２時間×13 回＝26 時間

⑤参加対象者の要件

・地域日本語教室で活動しているボランティアで、現在の活動を見直すための実践的な研修活動（アクションリサーチ）をする意思のある方。

⑥受講者の募集方法

【日本語ボランティアが訪れる施設などへのチラシの掲示・配置】

・磐田市：磐田市役所外国人窓口、磐田市国際交流協会、磐田市立中央図書館、磐田市立南御厨公民館、ワークピア磐田

・浜松市：浜松学院大学地域共創センター、浜松市多文化共生センター、浜松市外国人学習支援センター、静岡県西部地域交流プラザ・パレット

【メーリングリストに投稿】

浜松学院大学日本語教員養成プログラム修了生メーリングリストに投稿。

【ホームページにて周知・チラシをダウンロード可能に】

http://nihongocafe.sitemix.jp/special

【浜松国際交流協会発行「HICE NEWS」に掲載】

・HICE NEWS ６、７、９月号

【他のボランティア団体、教室にチラシ送付・配布】

・にほんごカフェ各教室：遠州浜、東新町、湖西、佐鳴台
・浜松日本語日本文化研究会
・日本語ボランティア協会
・磐田国際交流協会　西貝日本語教室

⑦研修会場

ア　講義

・浜松学院大学（浜松市中区布橋 3-2-3）

イ　実習

・「東新町にほんごカフェ」磐田市立南御厨公民館（磐田市東新屋 613）
・「佐鳴台にほんごカフェ」浜松市立佐鳴台公民館（浜松市中区佐鳴台２-24-１）
・「遠州浜にほんごカフェ」浜松市立五島公民館（浜松市南区福島町 242-1）

ウ　見学

・とよた日本語学習支援システム企業内教室（愛知県豊田市）
・保見ヶ丘日本語教室（愛知県豊田市）

⑧使用した教材・リソース

・「ワークシートを活用した実践アクションリサーチ」（大修館書店）

⑨講座内容

【前半：公開講座】

回	日時	講座名／学習内容	講師	受講者数
1	６月 20 日(日) 13:45〜18:00	地域日本語教育の課題と展望 情報交換会	尾﨑 明人 （名古屋外国語大学 教授）	３８名

2	7月18日(日) 13:45〜18:00	先進地域の事例紹介 -とよた日本語学習支援システム	衣川 隆生 （名古屋大学 准教授）	３０名
3	8月22日(日) 13:45〜18:00	日本語学習ニーズ -浜松の調査から見えてきたもの	金田 智子 （学習院大学 教授）	３０名
4	9月19日(日) 13:45〜18:00	「にほんごカフェ」誕生まで -地域密着型の活動が育んだもの	米勢治子 （東海日本語ネットワーク 副代表）	１９名

講義　　ワークショップ

【後半：アクションリサーチ】

回	日時	講座名／学習内容	講師	受講者数
5	10月15日(金) 15:00〜17:00	アクションリサーチとは	横内 美保子 （南山大学 准教授）	５名
6	10月22日(金) 15:50〜17:50	問題分析	三輪 千明 （浜松学院大学 教授）	５名
7	10月23日〜11月12日の間で１回	教室見学	-	２名
8	9月19日(金) 15:50〜17:50	目的分析	三輪 千明 （浜松学院大学 教	４名

	15:50〜17:50		授）	
9	11月12日(金) 15:00〜17:00	アクションリサーチ計画確認	横内 美保子 （南山大学 准教授）	４名
10〜12	11月13日〜 12月16日の間で３回	アクションリサーチ実践	-	４名
13	12月17日(金)	中間報告	横内 美保子 （南山大学 准教授）	６名
14〜16	12月18日〜 １月27日の間で３回	アクションリサーチ実践	-	４名
17	１月28日(金)	最終報告	米勢治子 （東海日本語ネットワーク 副代表）	６名

問題分析、計画

教育現場での実践

報告、意見交換

⑩講座の評価

１．受講生に対するアンケート

【公開講座の感想】

「興味深かった」・「大変興味深かった」を含めると毎回８割以上の高評価を得た。第２、４回の「大変興味深かった」は若干少ないが、地域においてまだ対話型教室への関心は高

いとは言えず、それが数に表われたと思われる。無回答が多かったのは、講座が長時間で終了時間の設定が遅く、帰りを急いだ方がいたことが考えられる。

	回答数	無回答数	大変 興味深かった	興味深かった	あまり 興味深く なかった	無記入
第１回	29	9	22（75.9%）	5（17.2%）	0（0%）	2（6.9%）
第２回	24	6	14（58.3%）	9（37.5%）	0（0%）	1(4.2%)
第３回	23	7	15（65.2%）	8（34.8%）	0（0%）	0（0%）
第４回	17	2	9（52.9%）	6（35.3%）	0（0%）	2（11.8%）

【公開講座／内容についての感想（一部抜粋）】

＜第１回＞

- 私が前々から思っていた日本語教育だけではなく、コミュニケーションに焦点を置くことについては新鮮でした。

- 日本語教室を「日本語を使う場」「人間関係を作る場」と位置づけることをやってみたいと思いました。「人間的な成長にどうかかわるか」という言葉が印象的でした。

＜第２回＞

- 分かりやすい日本語について改めて考える機会になりました。「外国人が日本語を学ぶ」ことは外国人のみの問題ではなく、やはり相互に関係しており日本（日本人）にとっても大きな課題であると改めて感じました。

- たいへんわかりやすい説明で、時間があっという間に過ぎました。日頃の自分の活動（授業内での会話活動）が未熟な中にもそう間違ってはいないということが確認できました。

＜第３回＞

- 学習ニーズについて、浜松と全国の比較はおもしろかった。学習者のニーズは実に多様で、表面上の言語の問題だけでなく、文化の違いや心理も考慮しなければならない。ニーズを正確に把握して、具体的な支援活動に結びつけるのは大変難しいことだと思った。

- 事例についてひとつひとつ、取り組めたことが面白く、とても良かった。言葉ひとつで、学習者の意欲を起こしたり、失くしたり、というこわさを感じたりもして、自分にとってはとても勉強になった。

＜第４回＞

- カフェのトピックの提示は、やはりむずかしい。(つい、構えてしまい、出てこない…)でも、身近にたくさんあることも、改めて実感できました。

- 会話をやさしい日本語を通じてお互いコミュニケーションを楽しく信頼関係を築くことが大切であること。無理することなく自然の会話の中から習得する日本語は身に付く日本語であり、気づきを想起させるカフェの形式をいつまでも存続していってほしいです。

【公開講座／地域日本語教室について各回の講演との関連で考えるところ】

＜第１回＞

- 共に学び合う場であることを忘れないようにしたい、気づくと「教える」側にだけ立とうとしている。そして、そのことが自分にプレッシャーをかけることになっている気がする。

- 地域だからこそできること、地域でないとできないことをしっかりと踏まえることが必要だと再確認しました。学習者を受け入れる以上、そのニーズと自分の教室の目的、地域での役割を把握し、活動をプランニングしていくことが大切だと感じました。

＜第２回＞

- 教室に関わっている講師やスタッフ、ボランティアが「教える」という意識から開放され、自分が日本語の環境のひとつであると考えてくれるといいなと思います。

- ボランティアの立場として日本語カフェに関わることがあります。つい、学習者の話の先取り（横取り？）をしてしまうことがあることに気づきました。学習者の言った以上のコメントをしない、ということが大変参考になりました。

＜第３回＞

- 学習者が「何をしたいのか」「どうしたいのか」「何になりたいのか」ということを可能な限り把握して、対応をできる様に、自分の日本語教育の「ストック」増やしたいと思いました。

- いろんなニーズ、レベルの人が集まってくる場合、それぞれの「できた」「達成感」を示していくことが大切だと思いました。他の人にとっては小さい成果でもその人にとっては進歩であれば「ほめる」「評価する」ことが必要だと感じました。反面、学習目標を設定するって本当に難しいなと思ってしまいました。

＜第４回＞

- カフェだけでなく、いろいろな場面との連携をもつ大切さがわかった。ーやっていることの連携が大切だと思う。

- 日本語学習者と同等の立場で彼らの生活基盤に根ざしたコミュニケーションの展開がいかに大切かがわかります。コーディネータやボランティアの力量をUPさせると共に、教室も活性化させていくと良いと考えています。

【公開講座／地域における外国人との関わり方、多文化共生社会について】

＜第１回＞

- 日本人も学ぶ必要があることは確かにそうだと感じました。また外国人を理解するために、地域に住む生活者として、見て見ぬフリをしない社会づくり、接触する機会を増やす（コミュニティをつくらなくてもよい）社会づくりを行政地域、企業がしていく必要があると感じました。

- 自治会やＰＴＡ、各種市民サークル等で、もっと外国人に門戸を開放すれば、生きた日本語を自然習得できる場が増えるだろう。外国人、日本人双方の積極的な参加・受け入れ姿勢が必要だと思う。

＜第２回＞

- システムについての前半の説明の中で「だれのため」という問いが大変重くのしかかってきました。お互いのため、一人一人すべての人に関わっているということに改めて気付きました。

- 外国人と接する日本人を変えていく活動を考える必要があるなぁといつも思います。

＜第３回＞

- 外国人が教わりたい日本語と、日本人から見て生活に必要と思われる日本語の、習得する優先順位に違いがあったりするようなので、お互いの意識調査をもとに理解をすすめることが必要だと思った。

＜第４回＞

- 与える立場に自分が立つのではなく、外国人の方に地域でみずから活躍してもらう為に何が自分にできるのか、まずはコミュニケーション力をつける必要を感じる。

- 「共生」という言葉自体がマジックワードと化しており、様々な立場、目的に使われているのが現状であるように思います。今日のお話も一つの方向性として非常に参考になりました。今後もこのような「共生」について考える機会が増えていくことを望みます。

【アクションリサーチ】

＜終了後の感想＞

- 活動を振り返って問題点を見つけることが大事で、そこから解決策を考え実践することの繰り返し。しかし問題点を見つけること自体が実はとても難しい。だがあえてAR

としなくても、活動を続けながら行っていくべきことであって、それをスタッフで共有することが理想。

- ARは個人でやることとはいえ（活動をともにする人たちと）共有しながらやることが大切。言語習得に不可欠な大前提として人間関係に注目したのは、自分にそれが欠如していたからではないか。
- 問題分析、ARともに良い経験になった。実施できる回数、時間が少なかったのは残念。
- 抱えていた問題を皆でわかちあうことができたのは良かった。
- 試行錯誤を繰り返して教室事業を終了することができ、今後も継続予定。参加者減少の原因は、外国人に教えようとする日本人側の問題であったと気づいた。
- 「継続は力なり」というが、活動を何も変えずに続けているだけではダメで、常に変化しながら良い方向へ持っていくことが大切。今回の研修は、自分たちの活動を変えるための良い機会だったのではないか。

2．実施主体からの研修内容結果評価

- ARは本来講座でとりあげるものでなく、もっと自発的なものであるべきだが、対話型活動の問題点が何かその一端を明らかにし、いかに解決できるか考え、たとえワンサイクルでも実践できたことは問題解決への第一歩となった。今回の参加者はみなARのできる素地や経験があり、コンセプトを理解し生かせる人たちだった。もう少し長いサイクルでできる研修ならより意味のあるものになっただろう。個人的にはとても貴重な体験だった。
- 参加者が少なくても、参加したコーディネータたちがカフェ参加者とともに問題解決していけば波及効果となり、後に研修がより意味のあるものとなる。
- 参加者が少なかったのは残念。本事業を1回で終わらせず、コーディネータ研修のようなものを今後も継続すればそれが、どのようなものか認知されて参加者も増えるのではないか。

3．実施主体からの外国人支援体制等今後の計画

浜松学院大学には平成19年度から社会人向けの日本語教員養成プログラムと並行して学部生向けの日本語教員課程が開設されているが、平成23年度からは小学校教員養成課程が開設される。そのなかの外国語コースでも日本語教員・日本語准教員という独自の認定資格を設け、外国人支援に係る人材育成の体勢を充実させる。学部生が地域の日本語教室活動の見学を希望する場合には、研修受講者の活動現場に協力してもらうなどの連携体勢を取る。

⑪事業の成果

1. 他事業との連携

公開講座では外国人支援に係る多くのボランティアが参加し、対話型以外の日本語教育活動や、外国籍児童の学習支援をしている人たちの割合も多かった。対話型日本語教室「にほんごカフェ」の参加者が多く、実践の現場も「にほんごカフェ」で教室参加者の協力を得て行うことができた。

2. 研修後の人材活用

AR を実施した受講者は既に対話型の日本語教室で活動中であるため、今後も教室コーディネータとして各自の教室活動に関わっていく。

⑫今後の課題

地域日本語教育の現場で起こる問題は個別具体的であり、個々の問題を取り上げて全体で講義するのではなく、ひとりひとりのコーディネータの振り返りと実践が必要である。今回の研修を通してその必要性があらためて認識された。こういった研修の機会を今後もより一層充実させ、地域日本語教室で活躍できるコーディネータのエンパワーメントに繋げることで日本語教育を現場から改善していくことが必要である。

今回の研修後半のアクションリサーチは参加者が少なかったが、対話型の日本語教室が地域にまだよく知られていないことや、現在の活動に対する問題意識をコーディネータ・教師が自覚していないことも考えられる。今後はこの研修の成果を活かした啓蒙活動も必要であると考えられる。